

芥川龍之介と中国古典

——「杜子春」を中心に——

銭芳

1. 研究の目的及び「杜子春」の由来。

芥川 の 作品 中、中国 古典 に 材 を 取 っ た も の は、い わ ゆ る 王 朝 物 に 比 し て、そ の 数 は 必 ず し も 多 く は な い。蒲 松 齡 の「聊 齋 志 異」中 の「酒 虫」に 典 拠 す る「酒 虫」、同 じ く「勞 山 道 士」に 基 づ く「仙 人」、唐 の 沈 既 濟 の「枕 中 記」の 翻 案 た る「黄 梁 夢」、「史 記」蘇 秦 伝 な ど に 拠 る「尾 生 の 信」、清 の 画 人 の「記 秋 山 図 始 末」に 取 材 し た「秋 山 図」、明 の 文 人 の「胃 唐 奇 遇 記」を 襲 う「奇 遇」な ど 数 編 が あ る。こ れ ら の 作 品 の う ち、た ん な る 翻 案 を 超 え た 彼 独 自 の 作 為 が 看 取 さ れ、ま た 彼 の 作 中 で も 最 も 多 く の 読 者 を 得 て い る も の の 一 つ で あ る「杜 子 春」を 素 材 と し て 取 り 上 げ る こ と に し た い。

芥 川 の「杜 子 春」は 全 体 の 構 成 や プ ロ ッ ト は 概 ね「杜 子 春 伝」を 踏 襲 す る も の で あ る。「杜 子 春 伝」は 唐 代 小 説 で、李 復 言 の 著 に よ る 神 仙 小 説 で あ る。な お、「杜 子 春」は 大 正 九 年（1920年）六 月 に 執 筆 さ れ、そ の 翌 月、鈴 木 三 重 吉 主 宰 の 童 話・童 謡 雑 誌「赤 い 鳥」に 掲 載 さ れ た。平 凡 な 人 間 と し て 愛 情 の 世 界 に 生 き る 幸 福 を 讃 え た「杜 子 春」に お け る 各 人 物 の 肖 像、「杜 子 春 伝」か ら 当 時 の 中 国 社 会 の 風 潮 に 対 す る 感 触 と 人 間 観 及 び「杜 子 春」か ら 窺 わ れ る 作 者 の 心 境 な ど に つ い て も 書 く こ と に し た い。

2. 「杜子春」における人物像

作 品 の 中 に は、色 々 な 個 性 を 持 つ 人 物 が 登 場 す る と 言 え る。こ れ か ら 杜 子 春、「お 母 さ ん」、仙 人 の 三 人 の こ と を 代 表 と し て あ げ よ う と 思 う。

杜 子 春 が「元 は 金 持 ち の 息 子 で し た が、今 は 財 産 を 費 い 尽 く し て、腹 は 減 る し、そ の う え も ど こ へ 行 っ て も、泊 め て く れ る 所 は な さ そ う だ し」とい う 憐 れ な 境 地 に な っ た 時、仙 人 に よ っ て、「洛 陽 の 都 で も 唯 一 人 と い う 大 金 持 ち」に し て も ら っ た。だ が、い く ら 大 金 を 持 つ と 言 っ て も、お 金 に は 際 限 は あ る。お 金 が な く な る 時 が く る と、「朝 夕 遊 び に や っ て き ま し た」友 達 は「門 の 前 を 通 っ て さ え、挨拶 一 つ し て 行 き ま せ ん」とな っ た。と に か く 大 金 は 杜 子 春 に 不 幸 を も た し た の だ。こ の よ う な 経 験 し て き た 杜 子 春 は、「人 間 と い ふ も の に 愛 想 が つ き た の で す」、「人 間 は 皆 薄 情 で す。」と 言 う。そ し て、杜 子 春 は も う 人 間 で あ る こ と を 放 棄 し よ う（仙 人 に な ろ う）と し、残 酷 な 世 界 か ら 逃 げ よ う と す る の で あ

る。つまり、現実には絶望したのだ。そして、仙人を志す試練を受けるのである。その試練とは、人間の情（喜・怒・哀・悪・欲・愛）を捨て去ることである。しかし、杜子春は愛の心だけは断ち切れず、仙人になれなかったのである。地獄に墜ち、畜生道に落ちた瘦せ馬となっている母親の「有り難い志」、「健気な決心」に接した杜子春が、「転ぶやうにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落としながら、〈お母さん〉と一声を叫びました」。杜子春は慈しむ親心を感じたのである。母親の自己犠牲の愛の心によって、杜子春はエゴイズムを克服したのである。閻魔大王から、「その方は父母が苦しんでも、その方さへ都合が好ければ、好いと思ってるのだなあ」と凶星をさされていたエゴイズムを捨て去れたことは、「いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳にはいきません。」という杜子春の言葉が証明している。人間である以上、必ず自分を育ててくれた父母のことを忘れる筈はないだろう。忘れることも許されないのである。芥川は杜子春の人間らしい性格を作り、見せてきた。

ところで、杜子春は「人間は皆薄情です。」という話の「人間」というのは一体なんだろう。「人間」とは、世間（他人）のことである。杜子春の自己否定を棚上げにした他者批判は幼児的心理を持っていたのではないだろうか。杜子春の幼児的な甘えは、親の財産を蕩尽して無一文になった時、「いっそ川へでも身を投げて、死んでしまった方がましかもしれない。」と考えるところに端的に現われているのである。現状を打開する前向きの姿がなく、元の自己への愛着だけがあるのだ。甘い環境で育ってきた杜子春は、厳しい社会で意志を磨いたり、つらい体験をしたりして、いくら苦しんでも頑張るしかないということにわかっていなかった。杜子春は言う、「人間は皆薄情です。私が大金持ちになった時には、世辞も追従もしますけれど、一旦貧乏になってご覧なさい。柔しい顔さへもして見せはしません」。甘えの心理以外のなにものでもない。大金持ちの自分と貧乏な自分が同じ自分だと彼が考えるのは勝手であるが、世間（他人）もそのように思うべきだと考えるのは甘えである。他人が手のひらを返すように態度を変えるのは当然である。二人の杜子春を同じ人間であると見做すのは彼の親だけである。彼は世間に対して親子間係を求めているのである。

つぎは、優しい母親のことを取り上げてみると思う。「杜子春」を読んで、心うたれるのは、地獄で責め抜かれる母親の杜子春への無償の愛であり、その母親の愛ゆえに発してしまった杜子春の「お母さん」という一声である。この所まで読んできて、いつも胸が熱くなってくる。畜生道に落ちて、みすばらしい瘦せ馬になっている父母が鬼どもの鉄の鞭を受けて「肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶に階の前へ、倒れ伏していた」にもかかわらず、「杜子春は必死になって、鉄冠子の言葉を思い出しながら、緊く目をつぶってしまし

た。「するとその時彼の耳には、殆ど声とはいえない位、かすかな声である」。実際は音声として発せられたものではない声であることによって、母親の愛の心は徹底的に見えた。「心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さへ仕合せになればのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰っても、言ひたくないことは黙って御出で」と母親の声も聞こえた。「さうして馬の一匹が、力なく地上倒れた儘、悲しさうに彼の顔へ、ぞっと眼をやっている・・・母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思ひやって、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さへ見せないのです。」というふうに書かれた。親としての心はかすかな声を通して伝わってきた。そして、声ではなくて、無言の母の表情が描かれるのが転換となった。こういう表現によると、言葉で表現しえない愛の深さをもつ母の悲しそうな眼差しという描写は一層読者の心を打ったり、感動を伝えたり、共鳴をさせたりしているのだろう。

最後に、登場人物の中で、注目される人物は勿論仙人であろう。「杜子春」の仙人は用意した正解（つまり、「何になっても、人間らしい、正直な暮らしをするつもりです」という人生観）を杜子春に発見してもらうために、杜子春にその答えを引き出させるために力を入れたと言える。杜子春が分かったのは、大金持ちになるのが本当の幸せをもたらす道ではないということである。仙人は杜子春が財貨の無意味さを知り、財貨に頼らない生き方を求めてやってくるのを待っていたのである。杜子春が仙人を志願すると、仙人は「眉をひそめたまま、暫らくは黙って、何事が考えているよう」のである。「仙人」という作品における仙人の「仙人はわかず、凡人の死苦あるに。」という価値観を持っていたからではないであろう。杜子春の命を奪わなければならない事態になるかもしれぬ危険な試験を杜子春に出すことに困っていたのではないだろうか。結末部分で杜子春はやっと仙人の望んだことに辿り着いたのである。「死んでしまった方がましかもしれない。」という絶望的、厭世的な悲壮感を持っていた杜子春に新たな生きる道を開いてくれた。仙人は生まれ変わった杜子春を完璧に作った。富が幸福をもたらせないこと、無意味なものであることを再確認した。新しい生きる道を歩む杜子春の誕生は全く仙人の意志によって作られた。仙人はご褒美として「桃の花が咲いている泰山の南の麓に一軒の家」を杜子春に与えた。このストーリーでは、厳しさもあれば、優しさもある仙人の肖像が見出せる。

ところで、仙人になる条件は苛酷で、人間としての七情六欲も完全に捨て去らなければならない。杜子春は平凡な人間として人情の自然に負けて、愛の心を断ち切れなかった。ここで考えるのは、鉄冠子が普通の人間からどういうふうに仙人になったのかという点である。鉄冠子は仙人になるために、同じ過酷な試験をうけさせられたのか。仮に、鉄冠子は杜子春と同じ立場に立ったことがあるとすれば、鉄冠子はどうやって殺さずに愛の試験に合格したのだろうか。結局、人間としても失格、仙人にも認められなかっただろう。凡ての

仙人は人間としての愛情を捨ててさることもありえないだろう。

3. 「杜子春伝」におけるモチーフ及び唐朝時代の社会風潮。「杜子春」におけるモチーフ及び作者は作品を借りて語りたい個人心境。

「杜子春伝」では、杜子春は放蕩者で家産を破り、親族からも見放されている。長安の街で飢寒に苛まれていた時、老人から再三に金銭を恵まれるが、蕩尽してしまい、人間であることを諦めて、仙人を志した。老人は、杜子春を五山の一つ、華山の雲台峯へと訪う。そこで彼が仙薬を鍊る間、杜子春は無言の行を命じられる。「尊神、悪魔、夜叉、猛獣、地獄、及び君の親属の困縛する所と為りて万苦すと雖も、皆真実に非ず。但当にかかず語らざるべく、宜しく心を安んじて怖ることと莫かるべし。」と。その挙げ句、閻魔大王によって女人に生まれ変わらされ、進士に嫁して子をなすが、やはり聾啞を装い続ける。妻に侮られていると訝った夫は遂に怒りを発し、「女房に鄙しめられてまで、何で息子のいるものか。」と息子の両足を持ち、頭を石に叩きつけた。頭は碎け、血潮が飛び散る。その瞬間、「愛」の気持が心に生じ、杜子春はとうとう声を上げてしまう。．．．．．

以上が「杜子春伝」の粗筋だが、この物語のモチーフは、近藤春雄も指摘しているように「上仙を求める風潮に反抗し、愛の尊厳を提唱することにより、人々の人間の本性に生きることを言ったもの」（「杜子春伝について」 愛知県立女子大学 説林Ⅰ1957）である。「当時の思想史的推移を大づかみに鑑みるなら、いわゆる唐・宋変革期にかけて、儒教の擡頭、ルネッサンスとも深部で呼応しつつ、道教系の思想脈絡においても、丹薬の精練といういわゆる＜外丹＞から身体技法や道徳的修養など個人の内的契機を重視した＜内丹＞を介しての気質の変化と、関心していた」。こういう上仙の挫折を描いたものは注目されていた。「杜子春伝」もこうした時代思潮の中で、愛は人の幸福の源、なにより大切な財産、かけがえない貴重なものということを読者に訴えてきたのである。塩谷温氏は「杜子春伝」を総括して、「最後に愛の試験に落第しましたが、重ねて道士の教を奉じ遂に仙化するに至りました。」とされ、「此の編は七情愛の執着の最も深さを説き、煩惱を去り、解説を求める方法を論じたものであります。」と評している。（「支那文学概論講話」大日本雄弁会1919）

さて、芥川の「杜子春」の創作意図において、素直に「杜子春伝」のモチーフを用いたと考えるのが妥当であろう。即ち、人間における「愛」の重要性を強調することである。芥川の「杜子春」は殆ど「杜子春伝」の枠組みに基づいて構成されたものである。ただし、芥川の作品中で二つのことは原典と大きな変動があった。

「杜子春伝」の杜子春が「資産蕩尽し」、長安を迷っていたのは冬である。龍之介は、その季節を春に改変しているのである。「日は暮れるし、腹は減るし、そのにもうどこへ行っても、泊めてくれる所はなさそうだし・・・こんな思ひをして生きている位なら、いっそ川へでも身を投げて、死んでしまった方がましかもしれない」。この憐れな身分になっている杜子春が「洛陽の西の門の下」に佇む季節は冬の方がふさわしいだろう。芥川は冬を春に改変したのは何故であろうか。芥川はストーリーの結末をハッピーエンドにさせるのは冒頭部分と呼応している。芥川は「仙人」と一体化して、積極的に杜子春の自己改造を促して待っていた。作品世界も明るい雰囲気覆われて、杜子春を桃源郷に暮らせることにした。「何になっても、人間らしい、正直な暮らしするつもりです」。杜子春は、やっと正しい生き方と人生観を発見し、選ぼうとした。しかし、母性愛のありがたさに感動した杜子春が他人への信頼を取り戻す契機は何一つも書かれていない。作者は「愛」の尊厳や重要性を強調するのも確かである。親心と他人の心との対比によって、親の愛情と思いやりは本当にすばらしいということに気付いた。ただし、杜子春が仙人を志したのは「人間は皆薄情」であることに気付いたのがきっかけであった。杜子春が発見したのは親の愛だけである。「薄情」な社会は何にも変わってなくて厳然存在している。親の愛を通して、世間（他人）の愛を発見するのも作者の意図ではないだろう。作者はただこの醜悪な世間から逃げる方法を杜子春に教えたに過ぎないだろう。富が無意味であり、世間が「薄情」であるならば、世間から自然のなかに移行する他なかろう。この意味において、石割透氏の次の見解は妥当であろう。

「子春は＜愛想が尽きた＞という人間愚に充ちた世界に戻るのではない。仙人から与えられた＜泰山の南の麓＞の＜一軒の家＞、桃源境を思わせる＜家のまわりに、桃の花が一面に咲いている＞一軒の家に帰るのだ。それは隠遁、或いは＜風流＞の世界を暗示するので、雑たる市井の世界に戻るのではない。仙人になることによって脱出しようとした＜薄情＞な世界に帰還したのではなく、＜人間＞の住まない自然のなかに移行したに過ぎないのである」。（「杜子春」 『信州白樺』1981年）

なお、「杜子春」が原作と異なっているもう一つの大きな点がある。芥川の「杜子春」では、畜生道に墜ち、瘦せ馬になっている父母が殴られるのを見かねて、「お母さん」の叫びを漏らす。それが子の親への親愛の情の発露であるのに対し、元来の「杜子春伝」の方は、ちょうど反対に親の子への愛情の深さが刻印されている。

おなじく仙術による上仙への希求とその挫折を描いて「杜子春伝」とそのモチーフやプロットが共通し、酷似するものは唐代伝奇の話も沢山あると言えるだろう。何と云っても「蕭洞玄」、「顧玄統」の話がその代表的なものである。大体の物語は、神仙になるため

に無言行を命じられる親は、人に子が殺される険境に瀕し、無言行は破れてしまうという内容に過ぎないのである。こうした類話の存在は、もとより当時の神仙への懷疑という風潮を如実に反映したのではあろうが、親の愛の心を現わすテーマを強調されているに違いない。中国では以前から母性愛、父性愛は子の親への情愛に勝るというモチーフで描かれた小説が多くある。なお、「杜子春」では、原話の「杜子春伝」に対し、ちょうど愛の発露するベクトルが逆転されたわけだが、この点に関して村松定孝氏は、「芥川が杜子春に〈お母さん〉と叫ばせた動機を、彼の実母の発狂という事実と結び付けて考えられる」（『唐代小説〈杜子春伝〉と芥川の童話〈杜子春〉の発想の相違点』『比較文学』第八巻『中国関係論説資料』第二分冊1965）というふうに述べている。

4. 研究の結論。

以上の考察と論述から次のことが分かる。

芥川 の 作品 を 見 て み る と、そこには「人間」というものに対してかなりの鋭い視線が描かれている。「純粹の都会人として、洗練された神経と、鋭い頭との所有者であった氏は、人間の心の微妙な動きに対する驚くべく細かな感受性と、緻密な観察力を示した。複雑な人間の気持に対する正しい理解をもっていた。極僅かな刺激に対する人間の心の反応をも見逃さない鋭さと敏感さをも見へていた。」（『歴史小説家としての芥川龍之介』 稲垣達郎）という評価も出てくるのである。

芥川は一般に理知的な作家だと言われている。芥川のいろいろな作品を覗くと、自分のまわりの諸悪、人間の愚昧、偽善などを辛辣な筆法で攻撃する。「杜子春」はどういうふうに作者の批評的な精神を貫きしているのか以下で見てみる。

「杜子春」は、当時の文学に新しく位置づけられたジャンルである童話として構造を持ち、それに基づいて書かれている。周知の正宗白鳥（『文壇人物評論』）の批評だが、「童話が年少者のためという条件を持つ点を無視した酷評」とするのが一般的である。「書振りが童話として書かれたらしく思われるが、作者の心持ちまでも童話の世界に安じている。」と述べているが、童話であることを意識しつつも「作者の心持ち」が童話的であることを白鳥は許さなかったと言える。たしかに、この作品は童話のパターンと関連していて、子供にそういう人間らしいさをわかってもらえばいいんだが、成人に童話として読ませねばならないことはないだろう。それでは、作家の心まで童話の世界に安じているのだろうか。作者の心持ちも童話的であるとも言えるのだろうか。

金持ちになれば、朝夕遊びにやってくるが、貧乏になれば、寄りつかぬという人間の薄

情を繰り返し語り、「人間というものに愛想がつきた」と杜子春は言う。杜子春の前にある人生、人間と作者の前にあるものとは本質的に相違はないのである。結末で、杜子春は仙人にしたがってこうした人間、人生を脱出することを叶えられはしなかった。このことは、作者自身も嫌悪な世界から逃げなかったということである。作者は現実からぬけていくのは不可能だと認識し、違う道を選んだのである。桃の花ざかりというところに作者の切実なねがい、桃源境志向がのぞかれる。それはけっして楽天的なものではなく、ただ現実からの一時的な気休めの気分であろう。心の安らぎを求めようとしていたのだろう。「作者の心持ちも童話の世界に安じている」どころか、この「桃の花」一つとって、偶然の機会により、下等な、退屈な人生を僅に忘れようとしているに過ぎなかった。杜子春が地獄で出す一声とその後に「人間らしい」心を持つ所には作者の人間観が窺われる。杜子春が出した結論は芥川の心からの願望にほかならない。

生後八ヶ月で実母が発狂し、母の実家芥川家に引き取られた龍之介は、他者に語り得ない、母を呼ぶ声をつねに心の奥底にひめていたと思われる。芥川における「母」については、「杜子春」を童話の型にして、情念の流露も自然な成り行きである。童話だからこそ、「流露した」というのは、中村真一郎氏が「童話は彼の魂のもっとも無垢な部分を盛ることのできた形成だった」というのにあたり、妥当であろう。

母を呼ぶ真実の声と「桃の花」の所に潜り込んで、現実を僅に忘れにすることは芥川の痛切は意識をうかがうことができるはずであろう。

芥川 の 作品を通して、それらの作品は作家龍之介の生活に溶け込んだものだと考えられる。作者自身の気持、考えとぴったり合わないなら、これらの写實的、理知的な作品も生まれてこないだろう。作者は、その文学から実生活における実感を排除することを強いられた、また実生活における自己表現に対する一切の情熱を放棄することを強いられた。それはまた、養子の身分としての自己ということを再確認で、実生活において自己の運命を享受した中で生きていくのである。「芥川の鮮やかな内面の外面かも、内界の隅々まで、外面化することをしなかった。それは抑圧された部分の内界は、何等かの表現を要求しつづけたとするのも、興味深いが・・・芥川文学が人間性確信から人間性不信至ったとする観方も、人間性の概念が漠然としすぎていよう」（「芥川龍之介の『歴史小説』—実生活との関連において」 石透割）というような見方もある。芥川の作品から、切実な厭世観を持って、＜時代＞に関わり合う人間としてではなく、本能と倫理の葛藤する普通の人間としてである全く離れた世界に独自に生き得る芥川の肖像も見出されたい。

.....

芥川龍之介の中国の歴史小説を取材した作品の一覧表（作品名と発表年）。

「酒虫」———大正五年	「黄梁夢」———大正六年
「尾生の信」——大正八年	「杜子春」「秋山図」——大正九年
「奇遇」———大正十年	「仙人」———大正十一年

.....

主要参考文献

「芥川の光と影」『芥川龍之介 作品の迷路』	(1993年)	酒井英行
「『杜子春』は何処から来たか—中国文学との比較による新しい読み」		
『国文学・解釈と教材の研究』	(1996年)	伊東貴之
「杜子春—母を呼ぶ声」『芥川龍之介叙情の美学』	(1982年)	平岡敏夫
「芥川龍之介の『歴史小説』—実生活との関連において」		
『芥川龍之介 日本文学研究資料叢書』	(1976年)	石透割